

# 夢中になって問い続ける生徒の育成

～教科の本質に迫る授業の工夫を通して～

## 1 はじめに

新型コロナウイルス感染症が全世界で猛威をふるっています。この感染症はいつ、どのようにして収束に向かっていくのでしょうか。その答えはまだ出ていません。この感染症拡大に伴う諸問題は、私たちに学校教育で生徒たちにどのような力を身につけさせていくべきなのかを改めて問うているように感じます。教師に問題を与えられ、出来合いの正解を出す生徒を育てるような時代はとうに終わりました。これからの時代には、生徒自身が主体となって学び続ける力が必要不可欠です。私たちは「夢中になって問い続ける生徒の育成」



」をテーマに掲げ、これからの予測困難な時代の中にあっても、しなやかに逞しく生き抜いていくことができる生徒の育成を目指しているのです。

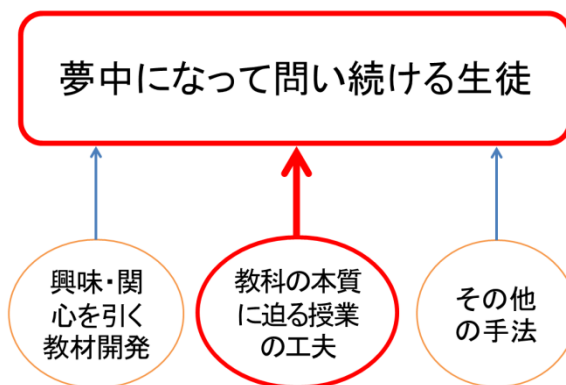
## 2 研究主題について

「夢中になって問い続ける生徒」とは、どのような生徒の姿でしょうか。私たちは、受け身で学ぶのではなく、「生徒が意欲的に学習に臨み、主体的に問いを持ちながら、学び深められる姿」と捉えています。

このような生徒を育成するために、私たちは「教科の本質に迫る授業の工夫」という道筋を選びました

(資料1)。例えば「夢中になって問い続ける生徒」の育成という目標に向かって「興味・関心を引く教材

の開発」という道筋を選ぶことも考えられるでしょう。「興味・関心を引く教材の開発」ができれば生徒が意欲的に学習する姿に繋がるということはイメージできそうです。しかし、「興味・関心を引く教材の開発」を中心とした授業で、生徒から次々に素朴な問い(疑問)を引き出すだけでは、問いが散乱し、学びを深めていくことに繋がらないのではないのでしょうか(資料2)。私たちは、「生徒が問いを持つこ



資料1 「夢中になって問い続ける生徒」への道筋

とができればそれでいい」と考えているわけではありません。「生徒の問いが学びの深まりに繋がることが大切だ」と考えているのです。つまり、生徒の問いに関連性を持たせるように誘い、深い学びに繋がるようにすることが必要なのです。そのためには、対象をどのように捉え、どのように関わり、どのように迫るかとい

う「見方・考え方」を働かせた教科等固有の学びの深め方が欠かせません。このことは、つまり「教科の本質に迫る」必要があるということです。教科の本質に迫るというプロセスにおいて、生徒の問いは深い学びへと導かれる形で繋がっていきます。そして、このような学びこそが各教科等で育成を目指す資質・能力の育成へと繋がっていくのです（資料3）。

このような学びを生み出すには、教師が単元あるいは1単位の授業で育成すべき資質・能力をしっかりと把握して、その資質・能力の育成に向けた手立てを持たなければいけません。そして、その手立ては生徒が主体的に問いを持ちながら学びを深められるような手立てであるべきです。例えば、「なぜ」を生み出すような生徒の予想に反する資料提示や「本当にそう言えるだろうか」と揺さぶりをかける発問、またこれまでに学んだ知識をフルに使って「どのようにすればよいだろうか」と試行錯誤する単元設計や

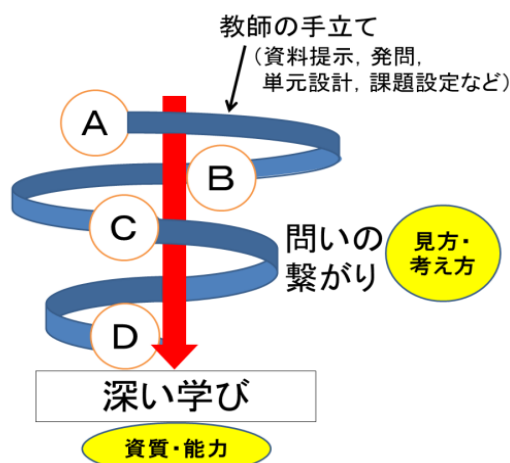
互いの意見を説明し合ったり議論し合ったりする協働学習の設定などです。そして、もちろんこの手立ては、教科等固有の「見方・考え方」が働くことを意図して打っていかねばなりません。

さて、教科の本質に迫る授業は、いわば「身の回りの世界の見え方を豊かにするメガネ」（資料4）を与えてくれるようなものです。例えば国語の文学作品で、人物の心情の変化が情景描写からも読み取れるようになれば、何気なく読んでいた物語が鮮やかな彩りを持つようになります。また数学で学ぶ相似の性質が実は絵画や建築様式に生かされ、自然の中にも隠れていることに気付けば、芸術や自然の美しさをより豊かに感じるようになります。

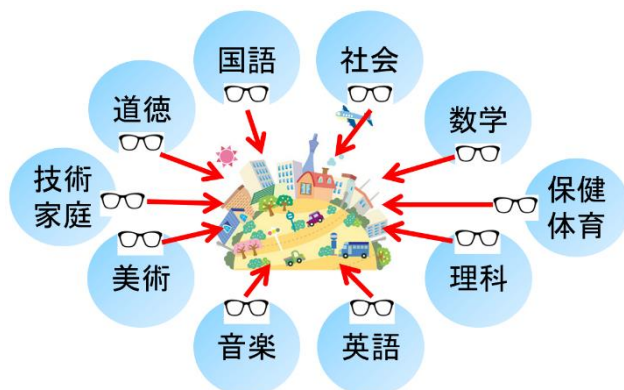
一方で、教科の本質に迫る授業は、異なる文化や



資料2 問いA～Dが散乱しているイメージ図



資料3 問いA～Dが学びの深まりに繋がるイメージ図



資料4 「身の回りの世界の見え方を豊かにするメガネ」のイメージ図

考え方を受け入れたり、その背景に思いを巡らしたり、他者を思いやったりすることに繋がる授業、いわば「身の回りの世界に対する関わり方を変える」ものです。

このような授業は、もちろん1単位時間で成り立つものではありません。単元もしくは1年間、さらには3年間という系統を考えながら迫っていくべきものです。私たちはこのような授業づくりに挑戦しているのです。

### 3 私たちが取り組んできたこと

私たちは、平成30年度11月から本研究テーマに沿った研究を行ってきました。まず始めたことは、各教科の本質とは何かを考えることでした。教科を学ぶ意義は何なのか、その教科固有の学びの深め方はどのようなものなのか、各教科で議論することはもちろん、教科を越えて議論を重ねました。また、その教科を学ぶことによって、どのような生徒の育成を目指すのか、そのためにどのような授業を行っていくのかを明示していきました(資料5)。令和2年度は、各教科で捉えた「教科の本質」を文部科学省の教科調査官の先生方にもご助言頂き、磨き上げているところです(詳しくは、各教科の紀要に譲りたいと思います)。



資料5 各教科の研究の方向性(本校HPより)

理論研究と共に授業実践力を磨くべく、私たちは一人一人が年間3回の研究授業に取り組んでいます。教科を越えて学び合い、切磋琢磨することで「学び合う、学び続ける教師集団」の風土が醸成されています。そして、研究授業では特に以下の3点を示すようにしました。

- ① 単元・題材で育成を目指す資質・能力
- ② ①を身に付けるために働かせる見方・考え方
- ③ 本時の具体的な手立て

これを示すことで教科固有の学びの深め方が明確になってきました。また、このような共通した授業づくり及び授業を見る視点を設けたことで他教科であっても、学び合うことがよりスムーズになり、事後の研究協議でも焦点の定まった議論が行われるようになりました。

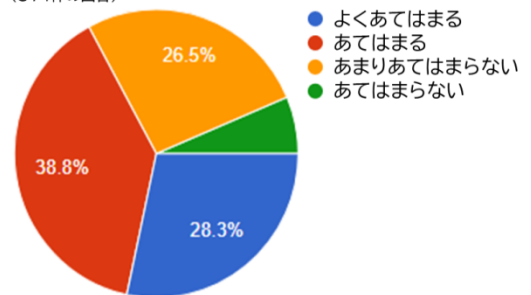
そうした取組の最中、新型コロナウイルス感染症による休校に見舞われてしまいました。私たちは、休校の状態であっても学びを止めないために遠隔授業に取り組みました。様々な方法の中でも教師と生徒、そして生徒同士のやりとりが可能な Zoom を使った授業を選びました。当初は Zoom を使ったことのある職員は2名しかおらず、手探り状態でした。しかし「学び合う、学び続ける教師集団」は、



資料6 遠隔授業での研究授業の様子

この遠隔授業に関しても互いにアイデアを出し合い、授業改善に努めました。そして5月18日には全職員で参観する研究授業を実施するに至りました(資料6)。これを皮切りに全教科、研究授業を行い1学期の間にすべての教諭が研究授業を行うことができました。これらの研究授業は、オンラインの強みを生かして京都大学の西岡加名恵先生、石井英真先生をはじめ全国の多くの先生方にも参観いただき、質問や意見を頂くことができました。遠隔授業では生徒の学習を肌で感じて授業をすることができず難しい部分がありました。しかし、家庭での時間が増え、自由に探究学習ができる時間が増えたこと、授業が入り口となって探究したくなるような授業設計が進んだこともあり、遠隔授業のアンケートでは「遠隔授業を受けて自分で調べてみたいことが出てきた」と意

自分で調べてみたいことが出てきた  
(374件の回答)



資料7 遠隔授業のアンケート

欲的な回答が約7割見られました(資料7)。このような生徒の探究につながる授業を対面授業でも大切にし、さらに生徒の「調べてみたい」を伸ばしていきたいと考えています。

一方、「夢中になって問い続ける生徒」を育成するために私たちは、生徒が主体性を発揮できる場も作っています。その一例が、研究授業の後に行う「響きあい学習会」です。「響きあい学習会」とは、生徒たちが主体となって授業を振り返り、今後の授業をよりよいものにするために話し合う会です(資料8)。各学級の学習リーダーが参加し、授業を参観しての気づきを共有したり、自分の学級での取り組みを紹介したりしています。これによって、生徒が主体となって学ぶ風土が醸成されていきます。



資料8 響きあい学習会の様子

生徒が主体性を発揮できる場は、これだけではありませ

ん。例えば避難訓練は、総代会（学級委員の会）が中心となって、どのようなケースの対応を訓練しておくべきか企画します。また「学校と社会をつなぐ」を合言葉に生徒主催の討論会（「附中生サミット」）を行いました。現在、国や世界が直面している6つの社会問題（SNSに関する問題、プラスチックごみに関する問題など）についてそれぞれの会場に分かれてパネル・ディスカッション形式で議論を行



資料9 附中生サミットの様子

ったのです（資料9）。会の最後には、それぞれの会場で専門家の方々からご助言を頂き、生徒たちの「もっと知りたい」という探究心を刺激するものになりました。「夢中になって問い続ける生徒」を育成するために、私たちはこのように生徒が主体となって運営する行事や教科の学習を活用して探究するような機会を大切にしているのです。

#### 4 終わりに

コロナ禍の休校期間に、3年生を中心とした生徒会執行部が「今、私たちには何ができるだろう。」という問いを持ち、何度もリモート会議を行い、全校生徒へのメッセージ動画の作成をしてくれました（資料10）。このような生徒の姿に本研究の成果は着実に出てきていると思います。一方で本研究はまだまだ途上でもあります。その中で各教科から提案する理論や授業実践について「本当に生徒が学習に意欲的になるだろうか。」「本当に教科の本質に迫れるだろうか。」と問いを持ちながらご覧になって頂き、共に探究して頂ければ幸いです。



資料10 執行部作成のメッセージ動画

#### <主な参考文献>

文部科学省：中学校学習指導要領，2018

澤井陽介「教師の学び方」，東洋館出版社，2019

西岡加名恵「教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価「見方・考え方」をどう育てるか」，日本標準，2019

苦野一徳「「学校」をつくり直す」，河出書房，2019

田村学「深い学び」，東洋館出版社，2018

奈須正裕「「資質・能力」と学びのメカニズム」，東洋館出版社，2017

石井英真「小学校発アクティブ・ラーニングを超える授業 -質の高い学びのヴィジョン「教科する」授業-」，日本標準，2017